

ほうれんそう

栽培暦

月	2			3			4			5			6			7			8			9			10			11			12			1		
	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下			
主 な 作 業	春播きトンネル ○ ————— ■																																			
	春播き露地 ○ ————— ■																																			
	夏播き雨よけ ○ ————— ■																																			
	秋播き露地 ○ ————— ■																																			
	秋播きトンネル ○ ————— ■																																			
	←————— 病虫害防除 —————→																																			

■栽培のポイント

1. 作付前に土壌分析を行い、pHをチェックし、6.5を目標に矯正する。
2. 良質堆肥を投入し、土づくりに努める。
3. 夏播きでは立枯病にかかりやすいため、本葉2枚頃までかん水を控える。

■品種・種子量 春播き：アクティブ、トリトン、ミラージュ、夏播き：プリウス、ブライトン、秋播き：トラッド7、クロノス、山形赤根。種子量：春・夏播き 0.80/a、秋播き 0.60/a。

■播種期 露地栽培では4月上旬から9月上旬まで、トンネル栽培では3月中旬から10月上旬まで播種できる。春から8月上旬にかけては、晩抽性の品種を用いる。

■施肥 肥沃で中性近くの土壌を好むため完熟堆肥を多用するほか、pH 6.5を目標に土づくりを行う。初期生育を促すことがポイントになるため、基肥中心の施肥とし、播種の10日ほど前までに混和しておく。

■うねづくり 発芽を揃え、根の伸長を促すために十分深耕、碎土する。排水状況にもよるが、やや高うね（5～15 cm）で、床幅90～100 cmのうねとする。

■催芽 夏播きの場合、発芽率を良くするため催芽したほうが良い。種子を布袋に入れ、全体の20～30%程度の芽が切れるまで流水に浸しておく。シーダーテープを使用する場合には、生分解性のテープを使用する。

■播種 播種は、条間15 cm程度の条播き。シーダーテープや播種機も利用できる。覆土の厚さは1 cmとし、軽く鎮圧する。

■かん水 発芽するまでは土壌を乾燥させない。生育期は原則としてかん水を控えめにする。夏播きでは、立枯病にかかりやすいため、本葉2枚時頃まではかん水を控える。

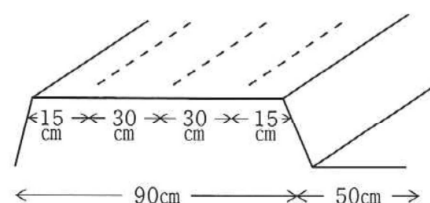
施肥例

(a 当り)

肥料名	基肥	追肥	備考
堆肥	300kg	—kg	成分量
苦土石灰	10	—	窒素 1.4 kg
苦土重焼燐	6	—	燐酸 3.1
燐硝安加里 S604	8	—	加里 1.2
液肥 2 号	—	0.5	

うねつくり

(3条すじまき)



(露地冬どり)



■**遮光** 6月下旬から9月上旬頃までの高温期には、寒冷しゃによる遮光で涼しく保つ。サイドは開放し、通風に心がける。

■**間引き** 本葉出始めに混んだところを間引き、本葉2枚時まで株間6cm位とする。秋播きでは株間10~12cm位とする。

■**追肥** 葉色や葉の伸び具合をみて、適宜液肥などを施す。この場合、肥焼けには十分注意する。夏播きでは原則として追肥しない。

■**病虫害防除** 生育初期の立枯病を防ぐため、高温過湿を避ける。べと病、アブラムシ類、ヨトウムシは発生初期に防除を行う。

■**その他** 乾燥しやすい土壌や降雨ではね上がりの恐れがある場合には、軽く敷きわらを行う。

■**収穫** 葉身長25cmほどで収穫するが、夏どりでは20cm頃より行う。播種後の収穫の目安は、春播きは35~40日、夏播きは25日、秋播きは60日前後である。

■**収量** a 当りで、春どり150kg、夏どり80kg、秋~冬どり180~200kg。

ほうれんそうの生育過程とかん水量

